

ノビタキ 英: *Stejneger's stonechat* 学: *Saxicola stejnegeri*

1. 分類と形態

分類: スズメ目ヒタキ科

旧北区からアフリカ南部に分布するノビタキ上種は約20亜種からなる単一種とみなされていたが、最新の研究ではこれらは6種に分割される(Zink et al. 2009). この分類に従うと、日本を含む極東には単一種からなる *S. stejnegeri* が分布する。ただし、日本鳥類目録改訂第7版では、この分類を採用せず、*S. t. stejnegeri* としている。なお、本種やツグミなどの旧ツグミ科は日本鳥類目録改訂第7版からヒタキ科に統合された。

形態:

小型ヒタキ類で、スズメより小さい。いわゆる“小型ツグミ体形”で、細くて短い嘴と長いふしよ(嘴峰長の約2倍)が特徴。尾羽を上下に振る動作も目立つ。清棲(1978)による各部位の測定値は以下の通り。

全長:	130mm	翼長:	64-71mm
尾長:	42-55mm	嘴峰長:	10-11mm
ふしよ長:	21-23mm	体重:	12-16g



写真: ノビタキ雄成鳥(左)、雌成鳥(中央)、雄冬羽(右:高木慎介撮影)

羽色:

雄夏羽は頭部から背と尾が黒く、腰は白い。翼には白斑がある。側頸や腹以下の下面は白色で、胸は橙色。雌夏羽は頭部から体上面が茶褐色で黒褐色の縦斑がある。翼の白斑は小さい。体下面は淡い褐色で胸に橙色味がある。冬羽は全体的に橙褐色で、雄は顔の黒味が強く、雌は喉が白っぽい。成鳥は繁殖後の8-9月に全身換羽を、幼鳥は体羽の部分換羽を行なう。冬羽から夏羽への移行は、換羽ではなく摩耗によることが知られるが、一部は換羽している可能性もある。

鳴き声:

雄は、木や小高い草のてっぺんのソングポストに止まり、「ヒュルヒョーヒー」などよく響く美しい声でさえずる。4月から8月ごろまでさえずるが、抱卵前の時期に特に良く鳴く。ソングポストからしばしばさえずり飛翔を行なう。地鳴きは「ヒッ」や「ジャツ」、「ガッ」。

2. 分布と生息環境

分布:

国内では、夏鳥として北海道の全域と本州中部・北部の高地で繁殖する。九州では熊本県阿蘇山で夏季に観察例がある。春秋には旅鳥として全国を通過する。西日本～南西諸島ではまれに越冬個体が見られる。

生息環境:

繁殖期の北海道では、海辺から山間にかけての多様な

開放的な環境に生息する。石狩・胆振地方では、灌木が少ない河川敷、ハマニンニクやハマナスに覆われた海浜草原、ススキなどに覆われた乾燥した二次草原、ヨシの間にスゲ類が生い茂った湿地で密度が高い。水田やフイヤガマに覆われた冠水した湿地は生息には適していない。農耕地も全道的に主要な生息環境で、耕作放棄地のほか、道路脇の法面、畑のあぜ道などでも小さな草地空間を利用して繁殖する。十勝地方では、皆伐後のカラマツ幼齢林でも繁殖するが(Yamaura et al. 2016a)、北空知地方の同様の環境には現在生息していない。大雪山系などの高山のハイマツ地帯で繁殖する個体もいる。

本州では繁殖期には低地には生息せず、高地にある灌木の散在する草地で繁殖する(清棲 1978)。非繁殖期は、岬や農耕地を中心に見られる。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬期			渡り		繁殖期			渡り			

一般習性:

繁殖期はつがいになわばりをもつ。非繁殖期は単独から数羽で行動する。大きな群れになることはない。開放地内の灌木の頂など目立つところに止まることが多い。

繁殖システム:

一夫一妻。繁殖期の雄は、渡来直後からなわばりを確保する。このなわばりは雛の巣立ち時まで維持される。つがい相手の雌は主にこのなわばり内で行動する。一回目の繁殖に成功したつがいの約70%は2回目の繁殖を行なう(Fujimaki et al. 1994)。北海道帯広市の二次草原の事例では、巣間距離は平均110m(範囲:50-163, n=53)、雄の前年のなわばりへの帰還率は52%(n=25)、雌では19%(n=36)だった(Fujimaki et al. 1994)。

巣:

巣は通常、草地の地面につくられるが、まれに草の上にもつくられる(Fujimaki et al. 1994)。巣は柔らかくて細い草本からなり、産座にはコケ類や鳥類の羽毛などが使われる(清棲 1978)。巣はお椀型で、外径10-15cm、内径5.6-8.0cm、深さ2.5-5.0cm、高さ6.0-6.5cm(清棲 1978)。

卵:

卵は淡緑青色で淡褐色の不明瞭な斑点が散在する。楕円形で、平均長径18.1mm(範囲:19.4-20.5)、平均短径13.6mm(12.5-14.5)、重量1.4-1.9g(清棲 1978)。

産卵、抱卵、育雛期間、巣立ち率:

一回目の繁殖の産卵は5月上旬、二回目の産卵は6月下旬-7月上旬に多い(Fujimaki et al. 1994)。雌が主に抱卵する。一腹卵数は3-7個で、平均一腹卵数は1回目繁殖で6.3卵、2回目繁殖で5.6卵。平均抱卵期間は13.6日(範囲:12-14.5日)。一腹雛数は1-7羽で、平均一腹雛数は1回目繁殖で5.8羽、2回目繁殖で4.5羽。平均巣内育雛期間は13.4日(11-15日)。一巣あたりの平均巣立ち幼鳥数は、1回目繁殖で5.7羽、2回目繁殖で4.4羽。幼鳥は巣立ち後5

-8日で草上に姿を現すようになり、巣立ち後10日ころまで親鳥の給餌を受ける。孵化率(孵化数/産卵数)は1回目繁殖時82.7%, 2回目繁殖時66.9%, 巣立ち率(巣立ち幼鳥数/孵化数)は1回目繁殖時81.4%, 2回目繁殖時89.7%, 繁殖成功率(巣立ち幼鳥数/産卵数)は1回目繁殖時67.3%, 2回目繁殖時60.0%。雛数減少や繁殖失敗の原因は、猛禽類や哺乳類による巣や雛の捕食, 草刈, 大雨, カッコウによる托卵などがある(Fujimaki et al. 1994)。

4. 食性と採食行動

鞘翅目(コガネムシ類, ゴミムシ類), 鱗翅目(蛾や蝶類の成虫・幼虫), 半翅目(カメムシ類), 膜翅目(ハチ類), 双翅目(ハエ類), 脈翅目(ウスバカゲロウ)など多岐にわたる昆虫類を食べる(清棲 1978)。採食方法は主に2種類あり, 空中を飛ぶ昆虫を食べるときは見通しの良いところからフライキャッチを行なう。一方, 地面を這う昆虫を食べるときは, 目視で対象を見つけ地面を歩いてついでに捕まえる。主要な採食手法ではないが, 被度の高い草地の内部に入り込んで, イモムシなどを採る個体もいる。また, 繁殖個体が雛へ運ぶ餌を観察したところ, イモムシを専門に運ぶ個体, 鞘翅目を専門に運ぶ個体などがおり, 餌種が個体によって分かれていた。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 本州を経由せず大陸に渡る石狩平野のノビタキ

ジオロケータをつけて北海道石狩平野で繁殖するノビタキの雄12個体の秋の南下ルートを追跡したところ, 10月初旬に繁殖地を発ち, 直接大陸に渡り, 沿海地方南部・ハンカ湖周辺に一時滞在した。その後, 華北平原を通過し, 中国南部からインドシナ半島(ラオス, カンボジア, タイ, ベトナム)で越冬していた(図1; Yamaura et al. 2016b)。

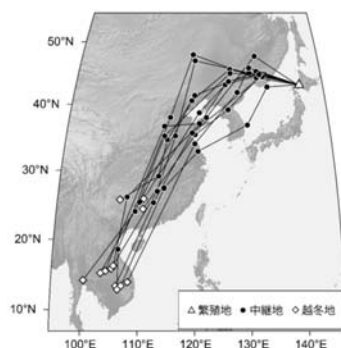


図1. 石狩平野で繁殖するノビタキ12個体の南下ルート(作成者の許可を得て転載)

また, 北海道松前町白神岬と青森県龍飛崎では秋期を中心に, 渡りと思われる個体が見られることから, 北海道と本州を渡る個体もいると思われる。ただし, 2010-2016年の9月から10月に津軽海峡の恵山沖で停泊する船から夜間に南へ渡る陸鳥を延べ10日間にわたり観察したところ, フクロウ類, クイナ, ヨタカ, セキレイ類, キビタキ, マミチャジナイ, センダイムシクイなど多様な陸鳥が数多くみられたものの, 本種は観察できなかった(先崎理之 未発表)。

本種の春の北上ルートの追跡はできていないが, 春の初認日は全道的に4月10日過ぎと共通していること, 本州以南での春の渡り期における本種の観察個体数は多くはないことから, 春も大陸から直接北海道に渡来している可能性がある。

なぜ石狩平野のノビタキは本州を経由せず大陸に渡る

のだろうか? この問いに答えるための鍵は, ノビタキが北海道に定着した過程にあるかもしれない。1万3千年ほど前, 最終氷期の北海道は寒冷で乾燥しており, 草地が広がっていた。サハリンを通して大陸とつながっていた北海道には, マンモスをはじめ多くの草地性生物が大陸から渡来してきたと考えられている。ノビタキも同様に北海道に定着したために, このルートが現在も残っているとは考えられないだろうか? 実は, 同様のルートは大陸に広く分布していたシマアオジの渡り期の記録状況からも推測されてきた。今後, 様々な種の渡りルートを明らかにすることで, この問いの答えが見えてくるかもしれない。

● ノビタキの繁殖成績が高い湿地 — チュウヒとのかかわり

北海道勇払原野で筆者が行なった研究(Senzaki et al. 2015)では, チュウヒの巣立ち雛の数が多い湿地では, ノビタキの巣立ち雛の数も多かった。ノビタキのほか, 検証した7種の湿地・草地性鳥類のうち, オオジュリン, コヨシキリなど5種が同様の傾向を示した。この理由として, 勇払原野のチュウヒは営巣する湿地でほとんど狩りをしないこと, チュウヒが小鳥類の捕食者を追い払うために, ノビタキの繁殖成功率が上がるのが考えられる。

6. 引用・参考文献

- Fujimaki, Y., Takamata, M. & Sato, F. (1994) Breeding biology of the Stonechat in southeastern Hokkaido, Japan. *Res Butt Obihiro Univ* 19: 37-46.
- 清棲幸保 (1978) 増補新改訂版日本鳥類大図鑑 I. 講談社, 東京.
- Senzaki, M., Yamaura, Y. & Nakamura, F. (2015) The usefulness of top predators as biodiversity surrogates indicated by the relationship between the reproductive outputs of raptors and other bird species. *Biol Conserv* 191: 460-468.
- Yamaura, Y., Connor, E.F., Royle, J.A., Itoh, K., Sato, K., Taki, H. & Mishima, Y. (2016a) Estimating species-area relationships by modeling abundance and frequency subject to incomplete sampling. *Ecology and Evolution* 6: 4836-4848.
- Yamaura, Y., Schmaljohann, H., Lisovski, S., Senzaki, M., Kawamura, K., Fujimaki, Y. & Nakamura, F. (2016b) Tracking the Stejneger's stonechat *Saxicola stejnegeri* along the East Asian-Australian Flyway from Japan via China to southeast Asia. *J Avian Biol* 47: 1-6.
- Zink, R. M., Pavlova, A., Drovetski, S., Wink, M. & Rohwer, S. (2009) Taxonomic status and evolutionary history of the *Saxicola torquata* complex. *Mol Phyl Evol* 52: 769-773.

執筆者

先崎理之

北海道大学大学院農学院博士後期課程
北海道海鳥保全研究会

博士課程でのテーマは猛禽類などのアンブレラ種と生物多様性保全の関係。現在は交通騒音などの人為的騒音が生物に与える影響がメインテーマ。プライベートでは主に海鳥と湿地・草地性鳥類を追う。

